

大学スポーツの存在意義について
大学スポーツの現状とこれから

国際文化学科 3年 米澤穂高

総字数 7991 文字

目次

はじめに 大学スポーツの現状 P1

体育の概念 P1-2

体育の特徴 P2

スポーツの語源と概念 P2

スポーツの特徴 P3

体育とスポーツの関係 P3-4

大学体育の概念 P4

ユニバーシアードから世界の大学スポーツを比較する 課外スポーツについて
P4-8

ユニバーシアードから世界の大学スポーツを比較する 一般体育科目について
P8-9

スポーツを通しての大学と地域の相互関係 福島大学スポーツユニオンから探
る P9-10

大学スポーツに対する学生の考え方 大東文化大学学生へのアンケートより
P10-16

まとめ 大学スポーツのこれから P16-17

参考文献 P18-22

はじめに 大学スポーツの現状

現在、スポーツの多様化が顕著である。そのなかで大学スポーツの存在はどのようになっているのだろうか。健康の維持、体力の増進など大学には私たちのニーズに対応してくれるさまざまな方法、環境が存在している。特に大学生にはそのようなゆとりがたくさんある。しかし、大学においてスポーツに対する問題点はたくさんある。そのような現状を打破し、良い方向へと導いていかなければならない。そこで大学スポーツの存在意義について大学スポーツの現状とこれからを通して論じていきたい。

体育の概念

まずは体育の概念からである。体育は戦前からの体操・体錬と言われていた教科に代わり取り入れられた教科である。体育の理念は「科学的に設計された身体運動を実践することで身体的な発達を助け、性格の形成、感情の陶冶、知識の発達、社会性の発達に寄与しようとする」(大学体育研究会編『新版大学体育』犀書房、1991年。)ものである。また、J・ロックは「健康な身体を作ることによって、はじめて全人的活動が可能になる」と体育の実践活動の重要性を説いている。さらにJ・J・ルソーは「知識を強化しようとするならばそれを支配する力を養えばよい。それには身体運動をし、常に身体を強くすることである。それによって人は理性的な教養を身につけることができよう」と述べてい

る。このように先人達によって体育は発展してきた。

体育の特徴

体育には「身体運動を主軸とする教育方法」という特色がある。体育が体育であるために大切なことは教育を構成する一分野として、何を目的としてその社会的機能を果たそうとしているかである。つまりその実践にはなんらかの体育的意図・意識が伴っていないなければならない。次の特徴としては、一般的な体育現象では指導者がいて、目的に沿って意図的に行わせることが多く、自発的というより、やらされる傾向の方が強いということだ。

このような特徴から体育はあくまでも健全で豊かな社会を築き上げ、人々が幸福を得るために、また明るく健康な人間形成のために存在しなければならない。

スポーツの語源と概念

sport の語源はラテン語の deportare にある。de 離れる portare 運ぶという意味である。そこから英語の disport、di/dis 離れる port 港、運ぶ、仕事するという意味になり現在の sport に到る。仕事からはなれ自由になるという意味から厳しい仕事から解放されて、大いに遊び、楽しみ、時には戯れるとなった。すなわちスポーツとは「楽しむ」という意味である。しかし現代ではスポーツの概念は「身体的遊戯」または「運動遊戯」など限定的なものにされてきた。スポーツの概念は曖昧なもので学問的には定めにくいのが現状だ。

スポーツの特徴

第一にスポーツとは楽しむためのものであること。次にスポーツは本来教育的効果を目的とするものではない。第三にスポーツに対する考え方は人それぞれ違う。自分自身が行うスポーツだけではなく見る、聞くといったものもスポーツである。よってスポーツの多様化現象が起こっている点だ。第四にスポーツの弊害についてである。例えば勝利主義に固執する点や商業主義に利用されやすい点、職場の放棄、学生の本分を忘れられてしまう点などが挙げられる。スポーツにはかけがえのない効用がある反面、弊害も生まれやすい。こういった功罪両面の体質がスポーツには含まれている。

体育とスポーツの関係

現代社会において体育とスポーツは同意語として考えられやすいが、実際は違うということがお互いの概念・特徴から分かる。しかしながら現代社会において体育とスポーツは密接に関係しているのも現実である。スポーツの目的は本質的には体育ではない。しかしスポーツをすることにより、偶然に体育的効果が発生することがある。また意図的に計画性を持って行えば、多くの体育的効果を期待できる。スポーツは体育の目的達成の媒体の可能性を多く秘めているからである。今後スポーツがさらに教育の場に取り入られる。その際に大切な事は、科学的分析を基礎とした運動処方に立脚したスポーツでなければなら

ない点である。

大学体育の概念

大学基準協会が発表した「大学における体育」には「学生の健康を保持増進し、社会的、道徳的精神を涵養し、もって大学生活を豊かならしめ、さらに進んで社会生活を価値あらしめる基礎を作るにある」とある。^{注1}これを達成するためには、学生の心身の発達段階を考慮に入れて、身体に関する科学知識と体育運動に対する社会的・道徳的意義を理解させる。^{注2}そして興味をもって自主的に個性に応じた体育運動を实践させる必要がある。^{注3}この学習が社会性の向上や友好の拡大に役立ち学生生活を一層豊かにする。さらにその技能の向上が生涯にわたる余暇活動にも運動を結びつける機能を果たし、社会福祉に役立つことをねらいとしている。

ユニバーシアードから世界の大学スポーツを比較する 課外スポーツについて

ここでは 1995 年に開催されたユニバーシアード福岡大会で諸外国 55 カ国、日本 202 大学への調査をされた結果から世界の大学スポーツを様々な観点から比較する。ユニバーシアードとは国際大学スポーツ連盟が主催する全世界の学生大会のことで 2 年毎に開催されている。

第一に大学スポーツが盛んになったか。という質問である。^{注4}これに対して

大学スポーツが盛んになったと答えた国々の多くは資本主義国で主に北米、次に中東、アジア、アフリカ、中南米でその比率は 70%以上である。対して社会主義国、またヨーロッパ、オセアニアでは半数前後が否定的な回答であった。また大学スポーツが各国のスポーツの一般化や高度化に貢献しているかという質問に対しても同様な結果が見られた。^{注5} 各国で人気のあるスポーツとしてはサッカー、バスケットボール、ラグビー、バレーボールなどが挙げられる。

日本では大学スポーツが体育・スポーツの中で重要な位置を占めているとの回答が 80%にも関わらず、盛んになったという答えは 29%にすぎない。また日本で人気のスポーツはテニス、サッカー、野球といった結果であった。

第二に対校競技(対外試合を目的とするクラブ)が当該の国の大学にどの程度あると思うかという質問についてである。^{注6} 北米では 90%がほとんどの大学にある、次いで中南米やアジアなどの比率が高い。だが、アフリカ、中東、ヨーロッパでは半数以上がほとんど無いと回答している。また、社会体制別に見るとほとんどの大学にあるという回答は資本主義国が 73%、社会主義国が 33%であった。

次に週当たりの練習回数についてであるが全体としては週 5 日以上または週 3~4 日が半数である。しかし北米のみ週 5 日以上が 77%と多く、アジアの 13%を除けばいずれも週 3~4 日または週 1~2 日という回答がほとんどでヨーロッ

パ、中東においては相対的に練習日が少ない。

そしてこれらのクラブの活動に関わる問題点と運営に関わる問題点についてである。まず、活動に関わる問題点だが、学業との両立が最も多く 40%以上であり、ついで商業化、過度の勝利主義が 10%前後である。しかし地域差があり過度の勝利主義については北米・アジア、商業化はオセアニア・北米・ヨーロッパにおいて各々顕著だ。また活動の停滞化がアフリカにおいてみられる。専門コーチの不在も北米以外では顕著である。一方運営に関わる問題点だが、資金不足が 60%と圧倒的に多い。

なおクラブ活動における人気種目はバスケットボール、バレーボール、サッカーが全体では突出している。これらの特徴としては低所得国ほどサッカーの人気が高く、相対的に人気種目が特定化されている。逆に高所得国においては人気種目が分散し、それらは国別差異が顕著である。

最後に 10 年間の対校競技クラブの発展状況についてである。^{注7} かなり発展したという回答は 94%で、やはり北米、次いでアジア・オセアニア・アフリカで肯定的な回答が多い。逆に中東、ヨーロッパでは否定的な回答が多い。社会体制、経済的水準からみても資本主義国あるいは高所得国に発展した国が多いが、低所得国の発展が著しいということこそ注目に値する。逆に社会主義国、中所得国における発展の停滞、衰退も著しい。

対して日本では対校競技を目的とするクラブは 4 年制大学を中心として展開されている。また練習時間であるが、半数近くの大学において週 3~4 日であるのに対して私立の 4 年制大学では週 5 日以上練習する大学が相対的に多い。そして、人気のある種目としてはバレーボール、バスケットボール、テニス、次いでサッカー、バトミントンが挙げられる。

次に現在のクラブ活動に関する問題点であるが、学業との両立、専門コーチの不在、活動の停滞化に問題は集中している。そして運営に関する問題点であるが、選手不足、資金不足、施設・設備の不足が多く指摘されている。しかし、これらに関して大学間の差異はある。

最後に対校競技クラブの最近 10 年間の動向を見ると 60%前後はあまり変わらないとしているが私立大学では肯定的な回答が多いのに対して、国立大学と短大では否定的な回答が上回り、活動の停滞化が懸念される。

第三に校内スポーツについてである。まず、北米などの資本主義国や高所得国では社会的交際や楽しみの追及など表出的、非功利的な目的を中心に活発に実施されている。対して、社会主義国や中・低所得国では健康・体力づくりなどの手段的・功利的目的のために行われる傾向があり、その活発度は前者の半分にも満たない。校内スポーツの問題点としては施設・設備不足が指摘されている。後者の国々ほどその比率は高い。

日本の傾向は北米の特徴に類似しているが、健康・体力づくりへの関心が極端に低い。また問題点としては施設・設備の不足、活動の停滞化が諸外国に比べて非常に多く指摘されている。

ユニバーシアードから世界の大学スポーツを比較する 一般体育科目について

第一に体育を含め一般教育科目が開講されている国はヨーロッパ以外の国では50%をこえている。^{注8}体育実技、講義ともに開講されている国はアジア、北米に多くアフリカ、中東には少なかった。またヨーロッパの高取得国に関してであるが、実技は開講されているが講義は開講されていないという傾向もみられた。日本では実技、講義共に100%に近い開講率である。

第二に体育実技が必修か選択かを見てみると、アジアでは必修であるが北米、ヨーロッパでは選択科目である。最近の傾向としては選択性への移行がみられる。しかし北米の一部では選択性から必修制への移行という新たな動きもみられる。

第三に体育実技における問題点である。各国共通で施設・用具不足を挙げている。その他にはプログラム不足、指導者不足を挙げている。

第四に体育講義についてである。体育講義に関しては上記の通りであるが、将来ほとんどの国において必修、もしくは選択科目への移行が予測されている。

また問題点としては設備・教材不足と講義内容の不十分さが多く挙げられた。

また日本においては学生の参加態度が消極的であるという問題点が挙げられた。

スポーツを通しての大学と地域の相互関係 福島大学スポーツユニオンから探る 注9

日本のスポーツは、欧米が地域を中心に発達したのに対して、企業と学校を中心として発達してきた。その発達方法は現在曲がり角に来ている。これからは地域と共存していく必要がある。大学は研究、教育、地域貢献という3つの使命を持っている。これらの使命は三位一体でありたがいに引き離すことは出来ない。大学は地域への積極的な貢献が社会から要請されている。地域貢献ということが重要な要請の一つにあるがその背景は何か。それは地域を取り巻く条件が深刻化、複雑化してきたからである。環境問題、医療福祉問題などは行政や産業界のみで解決できない。産・官・民・学が協力して解決しなければならぬ事柄が多くなってきた。こうして大学の創造的な地域協力へのニーズが高まってきたのである。こうした期待に答えるべく福島大学では福島大学スポーツユニオンが平成13年7月に発足した。ユニオンの具体的な事業内容は以下の通りである。

1 行政、企業等に対し、スポーツや健康に関する具体的な問題提起や政策提言を行う。

2 総合型地域スポーツクラブ育成・定着を支援する。

3 一般者の健康増進や競技者パフォーマンス改善を目的として体力測定やプログラムの開発を行う。また、医療費削減などの経済的効果についても調査報告する。

4 競技力向上のための一貫指導システム構築支援やトレーニング法に関する情報提供を行う。

5 プレイヤーやコーチを対象としたスポーツセミナー、また一般市民を対象とした健康講座やスポーツ教室を開催する。

6 ホームページによる情報提供やメーリングリストによる情報交換を行う。

逆に大学側とすれば学生や教官の活躍が大学のイメージを高め、イメージが高まることで学生が全国から集まったり、教官の研究の活性化につながり相乗効果を期待することが出来る。スポーツユニオンはそれぞれをつなぐ掛け橋のような存在である。大学の個性や自主性が問われる時代に入り、スポーツユニオンの役割はさらに重要になってくる。

大学スポーツに対する学生の考え方 大東文化大学学生へのアンケートより

2003年7月-9月にかけて大東文化大学に通学する大学生100人に大学スポーツに関する考え方のアンケートをとった。学年の内訳は1年生23人2年生27人3年生30人4年生20人である。男女比は男性40人、女性60人である。

学年比、男女比の多少のばらつきがあるためこのような結果になったことはご理解いただきたい。また今回は学年比、男女比を詳細に参考にしていないことも併せてご理解いただきたい。質問の内訳は下記の通りである。

1 あなたはサークル・同好会・部活に入っていますか。(表 1 参照)

2 あなたはなぜ、大学でサークル・同好会・部活などに入ろうと思いましたか。

3 あなたの入会当時の目標はなんですか。(表 2 参照)

4 あなたの今の目標はなんですか。

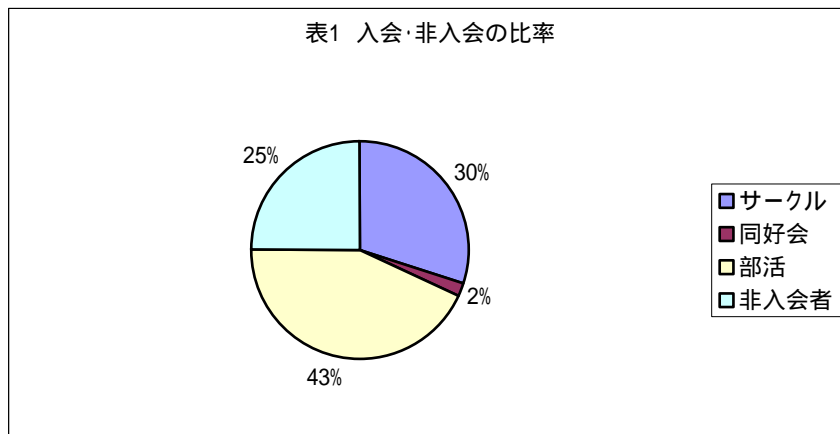
5 あなたの最終目標はなんですか。(表 3 参照)

6 大学を卒業してもスポーツを続けますか。(表 4,5 参照)

7 あなたにとって大学スポーツとはなんですか。

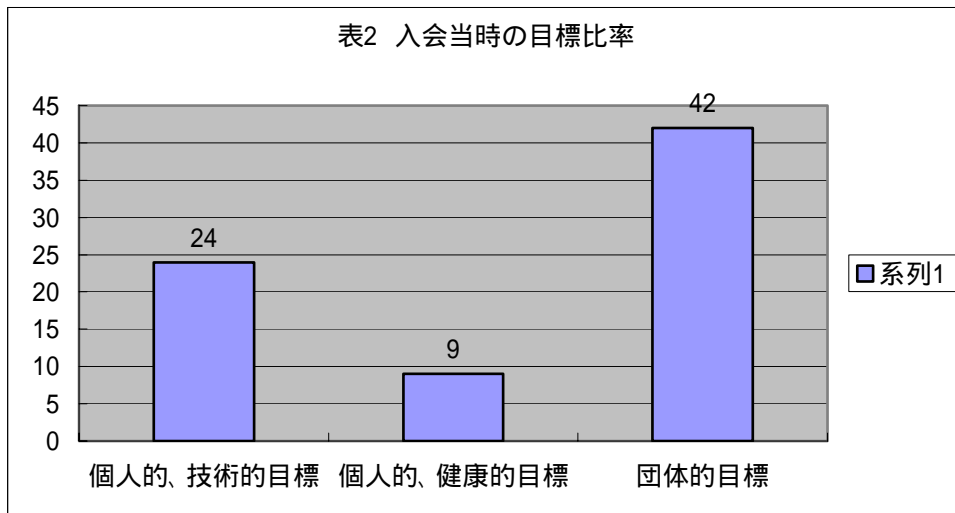
なお、1 で入っていないと答えた学生は質問の 2 はあなたが大学でサークル・同好会・部活などに入らなかった理由はなんですか。と質問した。また 3、5 の質問は無回答である。

1 の回答では、入会者が 75 人。非入会者が 25 人で、入会者の内訳はサークル 30 人、同好会 2 人、部活 43 人であった。



2の回答では、大学生活を充実させたかった。運動がしたかった。小学校や、中学校から運動を続けていたから大学でも続けたかった。最初に入る気が無かったが体験してみたら楽しかったので入った。大学まではなかなか体験できないスポーツをやってみたかった。友達に誘われた。高校まではそんなに運動していなかったのでしてみたかった。というのが主な回答であった。逆に入らなかった人の回答としては、バイトや勉強など他にやりたいことがあった。お金がかかりそうなのでやめた。スポーツに興味が無い。という回答が多数を占めた。これらの回答から学生達はいずれにせよなんらかの目標を持っていたことが分かる。目標が無かったり、ただなんとなくという意見も少数あった。

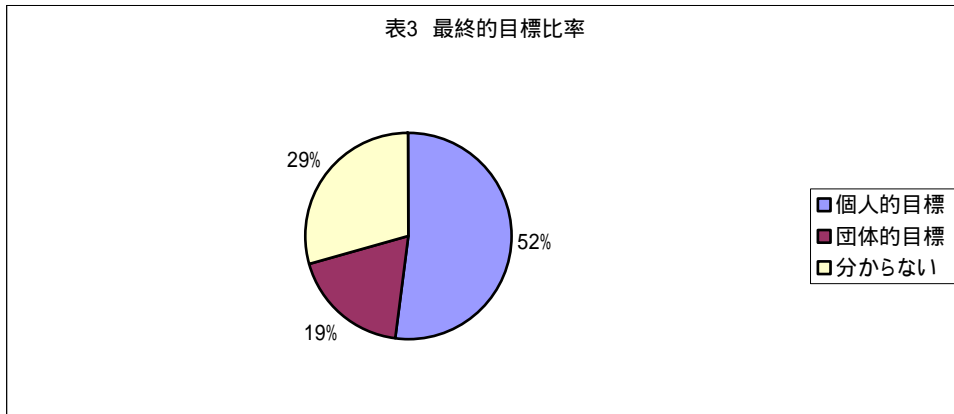
3の回答では、うまくなる。一生懸命がんばる。運動能力を高める。友達を作る。痩せる。などの個人的な目標と、一部昇格、優勝、リーグ戦で勝つ。など団体的な目標に分かれた。また前者では技術的な回答がほとんどだが、なかには痩せる。などといった健康的な面での目標もあった。



4の回答では、もっと余裕をもってプレー出来るようにする。楽しむ。精神的に成長する。日本代表に入る。などの個人的な目標と、部内で役割を果たせるように頑張る。リーグ戦優勝。などの団体的な目標に、質問3同様分かれたがここでは団体的な目標が多数を占めた。これらは入会者の回答である。続いては非入会者の回答である。しっかり就職する。望みどおりのところに就職する。夢をかなえる。資格をとる。結婚する。彼氏・彼女を作る。など、多数が目標を持っていたが特になにも無い人もいた。

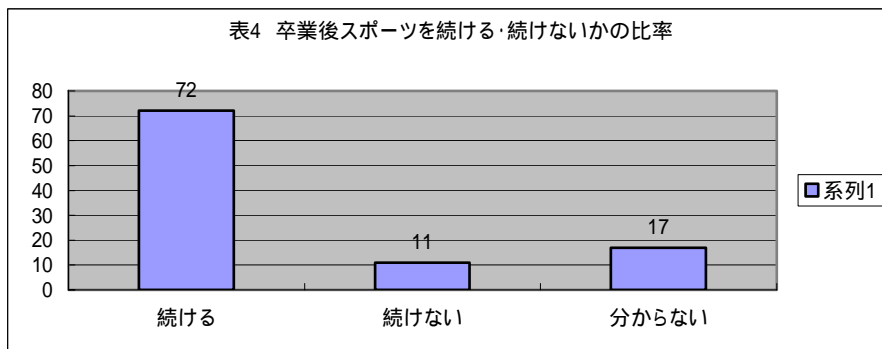
5の回答では、やってよかったと思えるようにする。先輩みたいになる。といった個人的な目標が多く、優勝や昇格、といった団体的な目標は質問3、4とは逆に少なかった。また、まだ最終的な目標は分からないといった回答が1、2年生に多くみられた。

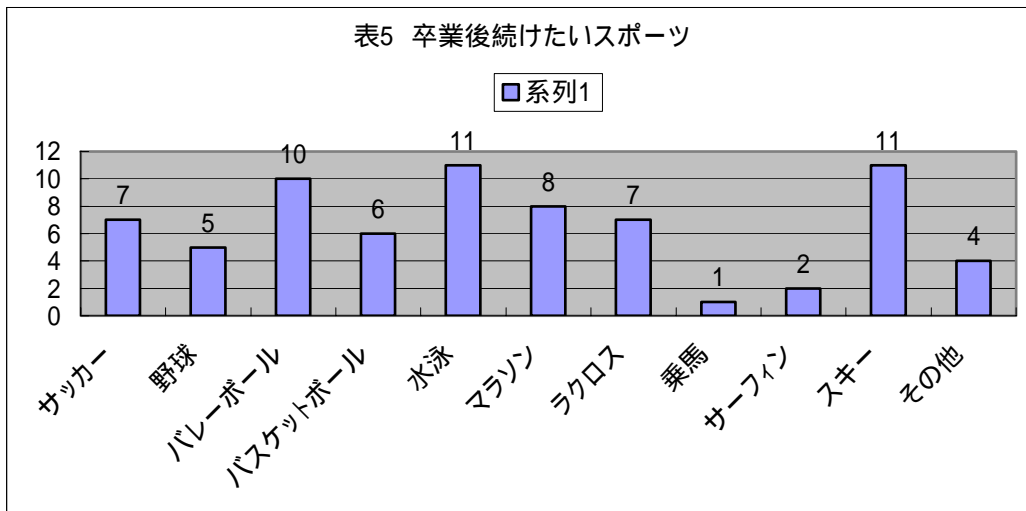
表3 最終的目標比率



6の回答では、続ける人が多数を占めた。その理由は運動が好きだから。生きていくうえで体力は必要だから。健康のため。という回答が主で、健康を考えている学生が多いことが分かる。さらに、行いたい主なスポーツは次の通りである。サッカー・野球・バレーボール・バスケットボール・水泳・マラソン・ラクロス・乗馬・サーフィン・スキー。このようにメジャーなスポーツからマイナーなスポーツまで学生たちの行いたいスポーツは多種多様であった。逆に続けないという回答の理由は、時間がなさそう。お金がかかる。やる気がない。大学までと割り切っている。といったものが主である。また続けるか分からない。という回答もあった。

表4 卒業後スポーツを続ける・続けないかの比率





7の回答では、きつそう。辛そう。本格的にやっている。情熱がある。本当に好きな人がやっている。かっこいい。楽しそう。明るい。新鮮。自由。高校の部活と変わらない。部活三昧。青春。キャンパスライフ。友達がたくさん出来る。あまり練習をしない。楽そう。といったように学生たちの考え方は多種多様である。また、目をひいた回答は、自由であるが個人の自己管理をしっかりしてやらされるのではなく、積極的に行わないとうまくなならない。部活のみ頑張っている。もっと他の事に興味を持つべき。といった2つである。前者は自由の中のモラルの必要性をのべており、このような考え方を実行するのはやはりある程度の経験や年齢を重ねなければ難しい。大学スポーツの存在に的を得た回答である。後者は大学スポーツの問題点の一つを的確に述べている。大学生である以上学問が第一でなければならない。そこからスポーツを考えていく必要がある。学生は本来の学生の本分であるところを忘れがちである。これが

多くの日本の大学におけるスポーツとの関わりの中で見られる現状の問題点の一つである。このような問題点を個々の意識の改革によって改善していかなければならない。

まとめ 大学スポーツのこれから

誰もが楽しめるスポーツ。現在、スポーツ種目が増加した。また、見る・するなどといったスポーツに対する選択肢も増加した。これらが人々のスポーツへの考え方の多様化を生み出した。大学スポーツはこの多様化に対応していかなければならない。そのためにはどうすれば良いか。下記のようにまとめた。

- 1 スポーツをより積極的に教育的な場にとり入れる。特に講義の授業を充実させる。
- 2 スポーツの一貫教育を行う。
- 3 学校体育から生涯体育へと意識改革を図る。
- 4 施設・設備の充実。
- 5 教員、コーチの育成。
- 6 勝利主義、商業主義に固執しない。
- 7 地域との共存
- 8 アメリカの NCAA のようにカレッジとしてしっかりした組織を作り文武両道を図る。

これが主な問題解決法だ。問題を解決するためには個々自身も意識を改革しなければならない。以上のようにこれからは大学の柔軟な対応が今以上に求められてくる。これからの時代は大学スポーツが日本のスポーツを担っている。また、日本のスポーツの発展は日本をも成長させる。これらが大学スポーツの存在意義である。

注 1 桜井悌二郎・小針藤男・須知悟『大学体育概論』福村出版、1978年。P12

注 2 桜井悌二郎・小針藤男・須知悟『大学体育概論』福村出版、1978年。P13

注 3 桜井悌二郎・小針藤男・須知悟『大学体育概論』福村出版、1978年。P13

注 4 多々納秀雄『スポーツ社会学の理論と調査』不昧堂出版、1997年。P262

注 5 多々納秀雄『スポーツ社会学の理論と調査』不昧堂出版、1997年。P263

注 6 多々納秀雄『スポーツ社会学の理論と調査』不昧堂出版、1997年。P264

注 7 多々納秀雄『スポーツ社会学の理論と調査』不昧堂出版、1997年。P266

注 8 多々納秀雄『スポーツ社会学の理論と調査』不昧堂出版、1997年。P272

注 9 福島大学スポーツユニオンホームページ

2003/10/1<http://www.h3.dion.ne.jp/~f-union/newspaper/032002.taiiku.html>

2003/10/1<http://www.h3.dion.ne.jp/~f-union/kuro1/0035html>

2003/10/1<http://www.h3.dion.ne.jp/~f-union/kuro1/0040html>

2003/10/1<http://www.h3.dion.ne.jp/~f-union/kuro1/0041html>

<参考文献>

水野忠文・猪飼道夫・江橋慎四郎『体育教育の原理』東京大学出版会、1973年。

大学保健体育研究会編『大学教養保健体育』道和書院、1974年。

八杉龍一・竹内敬人『論文・レポートの書き方改訂版』明治書院、1975年。

ジェームズ・A・ミッチェナー(宮川毅訳)『スポーツの危機(上)』サイマル出版会、1976年。

ジェームズ・A・ミッチェナー(宮川毅訳)『スポーツの危機(下)』サイマル出版会、1976年。

青木積之介・今西正敏・桜井治・棚田真輔『体育とスポーツの周辺』道和書院、1978年。

鎌田章・植田三夫・五日市享児・矢野博『生涯体育の科学』遊戯社、1978年。

桜井悌二郎・小針藤男・須知悟『大学体育概論』福村出版、1978年。

浅見俊雄・宮下充正・渡辺融編『現代体育・スポーツ大系第5巻学校体育・スポーツ』講談社、1984年。

浅見俊雄・宮下充正・渡辺融編『現代体育・スポーツ大系第12巻体育・スポーツ施設』講談社、1984年。

浅見俊雄・宮下充正・渡辺融編『現代体育・スポーツ大系第29巻レクリエーション』講談社、1984年。

浅見俊雄・宮下充正・渡辺融編『現代体育・スポーツ大系第 30 巻総索引・基本的文献一覧』講談社、1984 年。

石田俊丸編『大学生の体育と保健』道和書院、1984 年。

全国大学体育連合体力テスト委員会編『大学生の体力テストハンドブック』道
和書院、1987 年。

伴義孝『大学体育の改造』関西大学出版部、1988 年。

大学体育研究会編『新版大学体育』犀書房、1991 年。

A・W・ミラクル・C・R・リース(菅原禮監訳)『スポーツと社会理論』不昧堂出
版、1991 年。

荒川貞光・東川安雄『生涯スポーツチェック 99』大修館書店、1991 年。

宮下充正『トレーニングの科学的基礎』ブックハウス・エイチディ、1993 年。

日本体育・スポーツ教育大系刊行会編『日本体育・スポーツ教育大系第 2 巻学
校教育と体育・スポーツ』教育出版センター、1994 年。

日本体育・スポーツ教育大系刊行会編『日本体育・スポーツ教育大系第 10 巻レ
ジャーレクリエーション・野外活動』教育出版センター、1994 年。

篠田基行『スポーツの思想 スポーツ・ヒューマニティへの序章』技術書院、
1995 年。

スポーツ実践研究会『スポーツを知る・する・考える』不昧堂出版、1995 年。

中村敏雄『日本のスポーツ環境批判』大修館書店、1995年。

ナポレオン・ヒル(田中孝顕訳)『成功哲学』騎虎書房、1996年。

里見悦郎編『新ロシアのスポーツ研究』不昧堂出版、1997年。

ジョージ・H・セージ(岩田弘三監訳)『アメリカスポーツと社会 批判的洞察』

不昧堂出版、1997年。

多々納秀雄『スポーツ社会学の理論と調査』不昧堂出版、1997年。

余暇問題研究所編『現代人とレジャーレクリエーション』不昧堂出版、1997年。

A・R・ヴィアーナ・J・E・ヒゲイラ(戸苅晴彦監訳)『ブラジル・サッカーのフ

ィジカル・トレーニング』大修館書店、1998年。

島崎仁『スポーツに遊ぶ社会に向けて 生涯スポーツと遊びの人間学』不昧

堂出版、1998年。

中村敏雄『スポーツの見方を考える』平凡社、1998年。

G・ディンティマン・B・ワード・T・テレス(小林寛道監訳)『スポーツスピード・

トレーニング』大修館書店、1999年。

日本SAQ協会編『スポーツスピード養成SAQトレーニング』大修館書店、1999

年。

大澤清二編『スポーツの統計学』朝倉書店、2000年。

オモー・グルーバー・ミハエル・グリュウガー(永島惇正・岡出美則・市場俊之・

有賀郁敏・越川茂樹訳)『スポーツと教育 ドイツスポーツ教育学への誘い』ベースボールマガジン社、2000年。

金崎良三『生涯スポーツの理論』不昧堂出版、2000年。

高畑好秀『勝ちにいくスポーツ心理学』山海堂、2000年。

森永スポーツ&フィットネスリサーチセンター編『スピード強化のトレーニングと食事が分かる!』森永製菓健康事業部、2000年。

日下裕弘『生涯スポーツの理論と実際』大修館書店、2001年。

瀬戸進・水間恵美子『中・高・大学生スポーツテストの30年の変遷』溪水社、2001年。

ロナルド・A・スミス(白石義郎・岩田弘三監訳)『カレッジスポーツの誕生』玉川大学出版部、2001年。

渡邊融・臼井永男『改訂版保健体育 生涯スポーツへの誘い』放送大学教育振興会、2001年。

トーマス・R・ベックレー・ロジャー・W・アール(大杉規子訳)『フィットネス・ウエイト・トレーニング トレーニング計画の進め方』森永製菓健康事業部、2002年。

日本スポーツ心理学会編『スポーツメンタルトレーニング教本』大修館書店、2002年。

文部科学省編『「総合型地域スポーツクラブ」育成マニュアル』アドスリー、2002年。

岡野進編『概説スポーツ スポーツを学ぶ人のために』創文企画、2003年。

徳永幹雄『ベストプレイへのメンタルトレーニング改訂版』大修館書店、2003年。

2003/10/1<http://www.h3.dion.ne.jp/~f-union/newspaper/032002.taiiku.html>

2003/10/1<http://www.h3.dion.ne.jp/~f-union/kuro1/0035html>

2003/10/1<http://www.h3.dion.ne.jp/~f-union/kuro1/0040html>

2003/10/1<http://www.h3.dion.ne.jp/~f-union/kuro1/0041html>

2003/10/1<http://www.joc.or.jp/games/univ/enkaku.html>

2003/10/1<http://www.fisu.net>

2003/10/1http://www.jukushin.com/article/200207_02.html

2003/10/1http://www.jukushin.com/article/200207_03.html

2003/10/1http://www.jukushin.com/article/200207_07.html

2003/10/1http://www.jukushin.com/article/200207_08.html

2003/10/1http://www.jukushin.com/article/200207_09.html

2003/10/1http://www.wasedawillin.com/series/030306_kyodan/index3.html

2003/10/2<http://www.universiade-daegu.org/jpn/universiade/fisu.history.asp>